



李小仙オモニは数度にわたる投獄や拷問の後遺症に苦しみながらも最後まで労働運動の前線に立ち続け、社会の民主化と人間らしい生活を求めて闘う人々の精神的支柱となってきたが、2011年9月3日、その81年の生涯を閉じた。

「誰だって初めから生きるの大変に決まってる。それでも共に生きてきた人たちがいる。ありがたいう言葉。思いを果たせないまま、生き別れ、死に別れた人たちが何と多いこと。その人たちが皆、私の人生の主人公たちだ。ありがたいうことだ。言葉にし尽くせないくらいありがたくて、ありがたくて。懐かしいよ。会いたいよ。」
彼女が肉声で私たちに送ってくれた永遠の応援歌であり、希望への慰安だ。その希望と慰安を信じて、今、李小仙の「ありのままの声」を世に放とうと思う。(プロローグより―著者・呉道燁)

李小仙「イ・ソン」オモニが語った!

「この身が灰になるまで―韓国労働者の母・李小仙の生涯(原題「いやになるほど」)がたい人たちがよ―李小仙80歳の記憶」の邦訳(訳・村山俊夫)が、今春ついに緑風出版より刊行されました。ルポ作家・呉道燁(オ・ドヨ)さんが2年間、6000日にわたりともに暮らしながら掘り起こした李小仙さんの80年の記録と記憶です。息子全泰壹(チョン・テイル)の遺志を引き継ぎ、生涯労働者とともに歩み、闘ったオモニの姿とその思いは、きつと私たちへのはげましと希望となるでしょう!!



遂に刊行!

四六判/並製本
272ページ
定価:2,000円+税

緑風出版
〒113-0033
東京都文京区本郷2-17-5 ツイン寺岐坂
【電話】03-3812-9420 【FAX】03-3812-7262
【郵便振替】00100-9-30776
【E-mail】info@ryokufu.com
【URL】http://www.ryokufu.com/



あの子はね、人間が好きだったんだね。学のある人たちがやってきては、烈士がどうのこうのって言うんだけど、親にとってはただの子どもなんだ。泰壹は烈士でも闘士なんかでもなくて、ただただ人のことが好きな人間だったんだよ。それが焼身自殺したなんて言う人もいるけど、何が自殺なんだ。抗議したんじゃないか。焼身抗議って言わなくちゃ。だから、あの子を烈士とか闘士とか言わないで、同志って呼んでほしいね。全泰壹同志。そうじゃないか? 泰壹は今でも労働者のみんなと一緒にいる同志だつて。どうかそっと呼んでほしいって書いてよ。

ソウル・平和市場の裁断士の職を得て家計を助けるようになった李小仙の長男、泰壹(テイル)。しかし最愛の息子は、劣悪な環境でぼろぼろになって働く幼い後輩たちの労働条件を改善する運動を始め、1970年11月13日自らの身を炎に包んで労働者の惨状を世に知らしめた。

【内容】

- 第1部 貧しかった日々、固い絆
1945年8月―1970年10月
李小仙の見た夢/全相洙の絶望
/中央市場、浮浪児たちの母
/双門洞二〇八番地/テント教会
/泰壹に学んだ勤労基準法/夫の最後の贈物
- 第2部 炎の痕から立ち上がる人々
1970年11月―1971年9月
1970年11月13日/燃え上がる叫び/清溪被服労働組合/大統領に会いに青瓦台へ/屠菜粥と米の飯/粉々になった朴正熙/全泰壹の友人たち
- 第3部 暴圧の闇夜
1971年4月―1978年8月
張俊河、最後の日/民青学連と人革党/籠城の砦となった労働教室/女スパイ/水原矯導所の乾パンばあちゃん
- 第4部 大路に躍り出た人たち
1979年10月―1986年5月
戒厳令、指名手配そして軍事裁判/三人の孫たち/全泰壹評伝/取り戻した清溪労組と全泰壹記念館/九老ゼネストとソ労働/新興精密朴永鎮の遺言/平和の家籠城事件
- 第5部 美しき出会い
1986年8月―2008年11月
民主化運動遺家族協議会/大宇造船李錫圭/子を亡くした親たちの寄り辺ハウルサム/額縁の中の子どもたち
- 第6部 李小仙 幼い頃に
1929年12月―1945年8月
父/兄との別れ/簡易学校で覚えた九九/連れ子と呼ばれて/やんちゃたれ/紡績工場の辛い日々

【全】李小仙オモニ部屋

「この身が灰になるまで―韓国労働者の母・李小仙の生涯」を推薦します。

[本のご注文、並びに販売協力についての連絡先]

〒113-0033 東京都文京区本郷1-4-1 全水道会館 東水労・古田 武 090-3231-9651 binyan@ictv.ne.jp
 〒350-1162 埼玉県川越市南大塚2-14-16-611 北陽工房・斎藤 諭 080-1015-4145 ss24.ina@ae.auone-net.jp
 〒604-8226 京都市中京区西錦小路町253-402 緑豆楽院・村山俊夫 090-9257-2559 nokto@movie.ocn.ne.jp

